

至っているとつくづく思っています。軍隊が人間勉強の場で、人間らしい人間になれました。苦勞が立派な人間を作るのです。これから今の若い人も親を崇拜する人間になってもらいたい。

## 満州の邦人救出後、

### 無念の強制労働開始

愛知県 椎原芳郎

私が昭和十八年三月、初年兵として入隊した満州第九独立守備隊歩兵第三大隊第三中隊は、満州国西南部の熱河省省都承德市に司令部を置く三個大隊編成の旅団規模の部隊に属し、山海関に端を発する万里の長城を築いた北支那に接した地域の防衛、肅正作戦に従事していた。

当時の関東軍の中で唯一の実戦部隊で、相手は満州侵入を狙う毛沢東の共産八路軍であった。当然部隊は関東軍一番の精鋭部隊なりと意気も盛んであった。軍

服の襟についた「X」印のマークは鉄路を示すI（レール）を歩兵小銃を交差させて守る意味だった。このマークは全満の鉄道が無料乗車できる切符でもあった。

熱河省全域を三個大隊で守備するため十二個中隊のほとんどは禿げ山ばかりの岬々たる異容な山景の山の中の満人部落の隣に隊舎を設けていた。平地にある中隊はある程度の隊舎だったが、山中の中隊は臨時の隊舎が多く満人家屋を改造して使っていた。転々と移動するらしく私の中隊でも半年前にここ興隆県六撥子（リューボーズ）に来て一年後には別の土地に移動していた。だから戦友会で地名を言っても知っている人が少ない状態だ。

大隊本部は中隊とは異なってそれぞれの地域の中心になる小都市にあったから当然在留邦人が集まっていた。警察官は田舎に駐在していたが単身赴任が多く、家族は大隊本部駐屯の街に住んでいた。

昭和十九年八月、第九独立守備隊は第一〇八師団に改編された。三個大隊はそれぞれ歩兵連隊となり第三大隊は歩兵第二四〇連隊となり、第一大隊は興隆に、

第二大隊は承德に、第三大隊は青龍にそれぞれ本部を置き連隊本部は承德にあった。師団司令部も承德にあった。

昭和二十年八月十五日を境に満州は天国から地獄に転落し、各地で在留邦人の悲惨な状況が展開され、残留孤児の問題が五十年過ぎた現在でも社会問題として取り上げられている。関東軍が在留邦人を見捨てたとして世の非難を浴びているが、満州西南地区の承德方面には戦争孤児は一人もいないことを知る人は少ない。

終戦時、興隆の在留邦人は二六七名、兵員七五〇名は第一大隊長・下道少佐と共に全員北京方面に脱出を決意、八路軍の武器引き渡し要求を拒否、一週間の徒歩行軍の末、北支軍と合流に成功、全員無事帰国している。

承德の日本婦女子七百名は第二四〇連隊長・中村赴大佐の決断により特命少佐に任命された憲兵曹長小林多美雄の必死の対ソ交渉の結果、列車輸送により錦県に脱出し無事帰国している。しかし兵隊はモンゴルに

抑留された。

青龍の在留邦人三百名、兵員一千名は第三大隊長・依田少佐の指揮の下、軍民一体の徒歩行軍により途中の妨害を排除し、三五〇キロを踏破して二十五日後に錦県に到着した。邦人は半年後無事帰国している。兵隊はシベリア抑留となった。

昭和二十年八月九日、ソ連が不法にもソ満国境を突破し満州国に侵入した日である。その日、私は奉天の関東軍通信教育隊で暗号下士官教育を受けていた。早朝、ソ連軍進攻の報を受け直ちに教育中止、速やかに各自の原隊に復帰すべしと命ぜられ、一緒に教育を受けていた鎌田と共に、熱河省承德にある原隊第一〇八師団司令部に帰るべく教育隊を出た。満鉄出身の鎌田の誘いで満鉄社宅の知人宅に一泊夕食を馳走になった。

「明朝早起きして防空壕を掘ってあげようよ」と酒の勢いで約束したが、翌朝寝過ぎて慌てて駅へ駆けだす始末、全く申し訳ないことをしたと五十年たった今も後悔している。

対ソ作戦計画によると、我が第一〇八師団はゴビ砂

漠に近い林西にある要塞陣地に移り、ソ連軍を迎え撃つ作戦予定になっていることを教育されていたので、私の原隊復帰は当然林西に向かうべしと決めて列車に乗り込んだ。まず、教育を受けるまでいた承德の司令部に寄って自分の小銃や装具、私物を取って林西に行かねばと思っっているうちに列車は錦興駅に着いた。

ふと窓の外を見ると兵隊二人がプラットホームを歩いている。見たことのある顔だなあ、とよく見るとなんと自分と同室の暗号班の天藤さんだ。もう一人は私と同年兵で暗号兵の木村ではないか。承德にいたはずの二人がなぜ錦興にいるのだ。早速声をかけると向こうもびっくりしている。お互い息をはずませながら事情を確認する。天藤が「椎原、どこへ行くんだ」と、「教育中止で奉天から林西へ行く途中です」「なに林西だと、とんでもない早く汽車から降りろ。司令部は承德から錦興へ引き揚げているぞ」驚いて慌てて下車した。

ソ連軍の機動部隊が承德目指して南下山とのことだった。司令部は軍命令で錦興に後退、市中の女学校に移

動していた。暗号班は各所から殺到する電報の処理に忙殺されている。申告もそこに早速、暗号の組み立て、解読作業に取り組んだ。前線部隊からの指示を求むる電報、状況報告、電報の中で胸の痛くなるのは蒙古方面の国境監視隊からの救援を求むる電報「○○監視哨全滅。○○監視哨は家族と共に撤退中なるも敵の追撃急なり手配頼む」であった。一同声をのんで無事を祈るとともに全滅した勇士に合掌した。

承德にも通信隊の残留班が残り、山中から承德目指して後退中の連絡に当たっているとのことだった。承德の在留邦人の脱出が列車で行われ、鉄橋を渡った。その都度爆破してきたと聞き、残留班の運命も気遣われた。

八月十四日、重要書類の焼却が命ぜられ、女学校の校庭は書類を焼く炎と煙に覆われ、日の丸の鉢巻きを占めた少女たちがモンペ姿もかいがいしく忙しく動き回っていた。十五日、ラジオから流れる天皇の声は妨害電波のためかほとんど聞き取れず、時々かん高い声が聞えるが全く意味が分からなかった。「対ソ戦激励

のお言葉だ」との声が多かった。十七日、ソ連を迎えて決戦すべく遼陽に向け軍用列車に乗り、途中軍歌を歌って意気盛んであったが、十九日に意外にも一戦も交えることなく武装解除になり、茫然自失だった。

上司から「椎原は暗号書を始末せよ」と命ぜられたが焼却は不可能だ、埋めるしかない。一冊だけ残した赤い表紙の暗号書をソ軍軍使がいる応接室の窓の下に穴を掘って埋めた。見つかったら大変だと心配だった。

八月二十二日、雨の中を丸腰の兵士の列が首をうなだれて南に行く。奉天省鞍山の街では、白いエプロン姿の在留婦人たちが「兵隊さん頑張って！」と見送ってくれたが、製鉄所の杜宅に住んでいたあの人たちはその後どうなったのか。後日ソ連軍の暴虐ぶりが知らされているだけに安否が案ぜられる。雨の行軍の行く先は海城だった。

赤煉瓦の二階建ての建物に入る。十八年ころまでは豊橋の歩兵第十八連隊の兵舎だったそうだ。連隊が南方（サイパン玉砕）へ転出した後だった。海城には各地から部隊が続々と集合して来た。私は昭和二十年十

一月九日（ソ同盟革命記念日）までここに滞在した。

その間、赤痢のため八月三十日から十月二日まで三十四日間、海城陸軍病院に入院した。同年兵で山県の言によると、作業隊出発のため別れにきたが、高熱のため意識不明であったそうだ。司令部要員は旅順大連方面に連行されたのであった。

下痢が激しく、八木さんが竹を黒焼きした灰を飲ませてくれたそうだが、入院中の記憶が全くないのは高熱のためだろうか。いずれにしても戦友の皆さんのお陰で今日の私がある、有り難いことです。

退院が間近になったころ病院を抜け出して近所の満人農家に行き、家の中に上がり込んで卓を囲み、集まった三、四人の中年の人たち片言交じりで話し込み、白酒（パイチュー）を御馳走になった記憶が不思議にも残っている。確か農夫の名は角さん、沈さんだと記憶している。先日催された戦友会でこの話をしたら「よく殺されなかったなあ」と言われた。確かに敗戦直後の混乱期に敗残兵が戦勝国民の家に酒をよばれに行くなんて無用心極まりないことであった。

赤痢もいつしか治り、自然退院の形で赤煉瓦の兵舎に戻ったが見知らぬ兵隊ばかりで、暗号班の面々の顔が見えない。唯一鎌田君がいた。「皆の顔が見えないがどうした」と聞くと、作業隊を編成して出発したが、行き先は分からないとのことだった（大連、旅順で労働に従事）。司令部要員では鎌田君と猫田曹長の姿だけが見えた。

そのうちに十月十七日になると、第十二作業隊が編成されその中に入れられた。隊長は橋本という体の大きい大尉だが年配の人だった。各種の兵科の寄せ集め部隊で民間人もいるようだ。いつ出発してどこへ行くのか全く分からないが、運命は天に任せて出発までの、その日暮らしの生活が始まった。夜暗くなるのを待って酒好きな連中が自然とグループになり、酒やお菜を持ち寄り、焚き火を囲んで宮庭に車座となり連日会食が続いた。燃料廠の本坊曹長は薩摩隼人らしく豪放な人物。航空燃料のピンク色のアルコールを一斗缶ごと持参した。少年飛行兵のころ、末伍長は童顔の美少年だ。満鉄出身の薬科伍長は眼鏡をかけた温厚な人だっ

た。この人たちの行方は今だに分からない。

私は、班長を命ぜられ、西沢（色白ズーゾー弁）、立野（ヒゲ面）、玉置（和歌山県有田郡・大工）、伊波（沖繩）、日向（延岡市）、上地（大柄な男）、高瀬（ヒゲ角顔、短身）、佐藤栄（病氣入院）、増田（東京）の九名が班員だったと記憶している。住所も記録していたが帰国の際、没収されたので不明となった。この九名は他の部隊の兵隊で初めて会った人たちだった。

海城には一時約三万人が集合したそうだが、千五百人単位の作業隊が編成され、次々と出発していったが行く先は不明だった。次第に残り少なくなり、夜の会食のメンバーも、いつしか姿を見せなくなってきた。

昭和二十年の十一月九日、ソ連の革命記念日を祝う色とりどりの布で飾られた門をくぐって出発した。北進を続ける列車が途中停車する。有蓋貨車の扉が警乗兵の手で開けられると用便のため飛び降りる。再び扉が閉められ発車する。

突然、屋根の上で銃声が連続する。在満兵が脱走したのだ。満州在住の民間人の中に、脱走した日本兵の

補充のために騙されて連れてこられた人がいた。その人は隣組の集まりに下駄履きで来たら、ソ連兵に捕まって家族との連絡も取れぬまま、貨車に乗せられたのだから逃げなくなるのは当然だろう。死を覚悟しての脱走だ。銃声は止んだ。無事成功することを祈った。

満洲里駅に着いた。ここは国境だ。物凄い数の家畜の大群に驚く。牛、馬、羊、山羊、の群れが見渡す限り続いている。よくも集めたものだ。目を転ずると野積みされた高粱、米、大豆などの食糧の山だ。独ソ戦で疲弊したソ連は火事泥的な戦利品を満州から持ち去ろうとしていたのだ。鞍山の製鉄所を解体してネジ一本まで持ち去ったそうだが事実だと思う。

海城を出発してから十六日目の十一月二十五日（帰国直後のメモによる）の深夜、下車。着いた所はチャ市近郊のチェリノフスカヤという炭坑の街だった。隊列を整えて歩き出した。闇夜の行進だ。両側に正体不明の黒い壁が続いている。何か？よくよく見透かすと人間だ。無言のまま住民が両側に並んでいるのだ。実に無気味だ。掠奪を狙っているのだった。果たして

「糧秣車がやられた」と後方から悲鳴が上がった。予想されるこれからの飢餓を思っただけに暗雲が垂れ込めた。

翌朝、目が覚めると立野が「これが上がりました」と差し出す飯盒の蓋一杯に黄色のバターのようなものが入っている。「何だこれは」とつまんで見たら卵黄だったが在ソ中、再びこれを見ることはなかった。正月には米飯が出たが通常は高粱飯だった。それも永續させず、満州から持参したものが尽きるとソ連給与になり、黒パン一片とグリーンピース五十粒くらいが入っただけの塩水スープに変わった。下痢が続いて栄養失調症になり、死者が続出するという抑留地獄の序曲が始まったのである。「働かざるものは食うべからず」が原則の共産社会では労働が鉄則であった。

敗戦、抑留という激変に対応する暇もなく、昭和二十一年一月末には炭坑作業二十四時間三交代の強制重労働が開始された。足尾銅山の町に生まれた私は坑内に慣れていたから平気だったが、大半の兵隊は初体験だったであろうから暗い坑内に入る心理的圧迫は想像

を絶するものがあつたに違いない。炭塵が浮遊して天井の杭木に吊された裸電球の光がポーッとかすんで見える。疲れて蒼白い顔をした日本兵の汚れた軍服が浮かび上がる。くねくねと曲がったトロッコレールは石

炭を満載した炭車を意地悪く脱線させる。「ザブリューだ！」だれかが叫ぶと近くで働いている兵隊が炭車にしがみつく形で持ち上げようとす。 「セーノ・ヨイシヨ、セーノ・ウーン」と繰り返すが一向に持ち上がらない。小さな黒パン一片と塩水だけのスープが一日の食料では、とても力が出ないのである。収容所から作業する場所まで歩くのが精いっぱいなのである。

初めて炭坑に入れられた昭和二十一年の一月ごろは、五人が力を合わせれば案々と上がった炭車が一年後には、とてもできない厄介物になったように体力の減退は目を覆うばかりである。レールのジョイントが悪いのだから修理すればよいものを一向に直す気配はなく、たびたび口汚く「ヨッポイブロー」とののしるロシア人の監督である。

炭車が脱線すると、坑外の引込線に待機している無

蓋貨車はなかなか満載にならないから貨物列車は発車できない。当然、監督のノルマは達成されることはない。仕方なく監督自らが炭車の持ち上げに協力して脱線は回復することになる。

また、監督不在のときは女性労働者が登場する。独ソ戦で男性不足のシベリアでは女性が炭坑に入って石炭生産に寄与しているのだ。

ロシア女性といえば我々のイメージはハルビン地区に住む白系女性であり美人でスタイル抜群である。炭坑にいるロシア女性は全く逆のスタイルで表現は正に牝牛が適切である。四斗樽に手足をくつつけたような太い腰部、長靴をはいた白くて太い素足と太い腕。

やせてふらふらの我々を見てられないと言っても言っているのだろう。何やら喚いて、炭車に群がる我々をどけると背中を炭車にくつつけて手を炭車の下にかけると「セーノ・ラッシュ」と掛け声かけて石炭が山盛りになった炭車をたった一人で、いとも簡単に持ち上げて脱線を通してしまった。周りで見ていた我々が「ハラシヨ」と手を叩くと、彼女は得意げにウィンクして

去っていった。

炭車の脱線直しは我々の体力を大いに消耗させた。飢えと寒さで衰えた体力を加速度的にさらに衰えさせたのは炭坑労働であったが、その原因は正にこの脱線直しだった。

シベリアに住むロシア人のほとんどが土着人でなく、東部から移住して来た人であることが次第に分かってきた。移住といっても自分の意志でなく、強制的に移住流刑させられたということであった。独ソ戦に参加した兵士でも独軍に捕虜となり、後日、ソ連軍に解放された者はすべて犯罪者扱いとされ、西部シベリアに送られ強制労働に従事させられたのである。また、東欧諸国の市民も独軍に占領された地域の住民は同様の処罰が加えられ、遠いシベリアに送られたのであった。入ソ当時現地人をうらやんだことがあったが、実情が分かるにつれ故郷に帰る当てのない彼らの運命こそ哀れであった。

炭坑で一緒に働いている現地人と話しているうちに、実に多種の民族が流刑されているのが分かり、聞いた

ことのない民族の名を知らされ驚いた次第である（六十四の人種がソ連を構成している）。スターリンをどう思うかと質問すると急に真顔になり周囲を見回し他の人がいないのを確かめてから、声をひそめて「ニエハラシヨ」と指を「X」印に交差して囁いていた。家族ぐるみで流刑され、息子と共に入坑しているアルメニア人親子は坑内の鍛冶屋とか言っていた。坑外で廃石の処理係の肥満体のブルガリア人は運搬車を誤って捨て場に落とし「困った、困った」を連発していた。

私は在ソ二年間で帰国したが、彼らがあれからどうなったか知るすべもないが、スターリンの恐怖政治のシンボルは正にシベリア流刑であろう。私がいたチタ市近郊のチュリノフスカヤは炭坑の街で住民のすべてが流刑者である。

炭坑は地表から極浅い炭層を掘り尽くすと廃坑にして次の炭層を掘り始める始末。従って坑内の安全対策は極めて劣悪であった。採炭現場に至る途中の坑道は天井が沈下して高さ五〇センチしかない。これ以上沈下したら奥で作業している者の脱出路はない。生き埋

めにされてしまう。流刑地で生き埋め事故があってもモスマクワまで知らされることは恐らくないであろうと思うと足がすくむ。

採掘の先端は掘り進むそばから天井の補強をしているのだからその用材の丸太を運び込まなければならぬ。その丸太運搬が日本兵の仕事になる。直径三十センチくらい丸太を奥へ運び込むときは、わずかに残された空間をどうして通過するかが問題だった。まず、無事通過して奥へ行けたとしても果たして帰ってくるまでにこの空間が原形を保っているだろうか。

匍匐（ほふく）前進の形で二人で背中に丸太を乗せ、掛け声を合わせながら這って進んだ。丸太を現場に届け急いで帰り、狭い穴を潜り抜けてやっとな、ホッとしたものだった。

掘った石炭はコンベアに乗せられトロッコ線路まで運ばれる。この炭坑のコンベアはベルトコンベアではなく平底の舟形鉄板の連続で、前後の振動で石炭が鉄板の上をズリ動いて前に進む珍しく原始的な形式だ。だから騒音も激しい。炭車に積み込む道具はスコップ

だが、四十センチ角の大ききで、手で握る部分は日本人の掌では握り切れない太きで、途中で曲がっている奇妙なものであるが、石炭を掬って炭車に投げ入れる作業にはまことに都合のよい作りになっていることが実際に作業してみても初めて理解できた。曲がっている部分が膝の上に当たって槌の応用になるのである。

満載された炭車は本線のレールまで押して行き、ワイヤーに引掛けて斜道を引き上げられ、地上の「ヤグラ」上で回転され、中の石炭が無蓋貨車にあげられる仕組みになっている。

炭車をヤグラ上でワイヤーから外す係を私の班の増田上等兵がやっていたが、前述したような劣悪な食糧事情で体の動きが鈍くなっていたために、ワイヤーを外すため腰を曲げて後退してワイヤーが外れず、そのまま炭車に挟まれ頭部骨折で即死してしまった。我々は報を受けて急行してみると、両耳から血が出ているだけで眠っているようであった。東京出身者で、生前東京の大空襲で肉親が全滅になったと話をしていて「日本に帰ってもだれもない」と言っていたが

わいそうなことをした。

このような戦友の悲劇を見て、我々の今後の運命に  
思いをいたしながら、在ソ二年間の不法就労の日々を  
送られたのである。